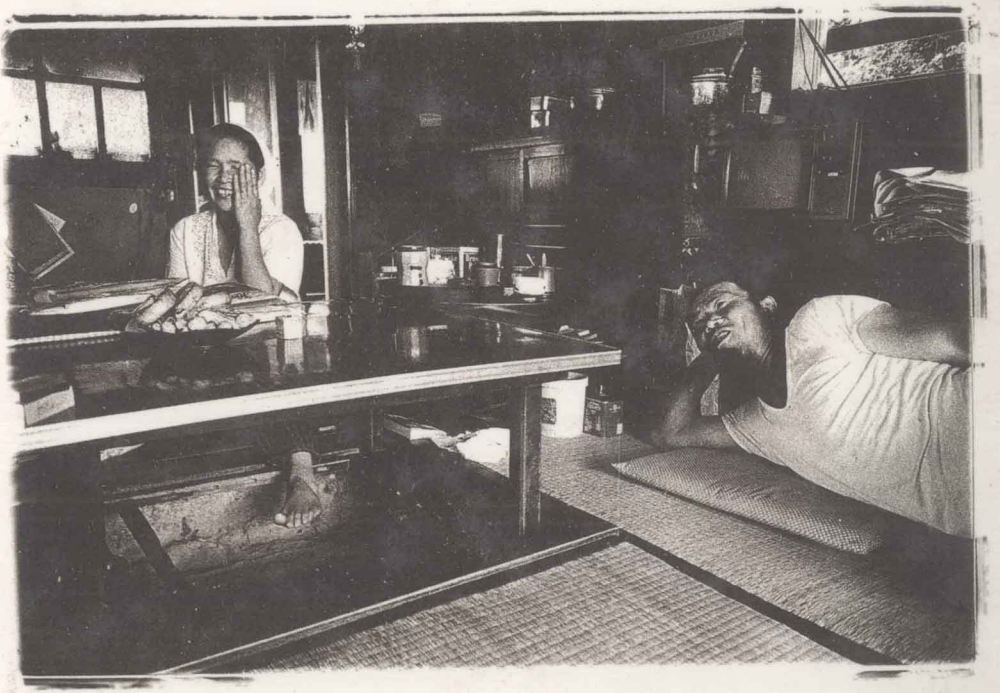
家族原点

木戸征治



晶文社

家族原点（かぞくげんてん）

一九八六年一月二五日発行

著者　木戸征治
発行者　株式会社晶文社
東京都千代田区外神田二-一-一二
電話東京二五五局四五〇一（代表）・四五〇三（編集）
振替東京六-六二七九九
サンニチ印刷・壮光舎印刷・牧製本
© 1986 Seiji Kido
Printed in Japan
本書の内容の一部あるいは全部を無断で複写複製（コピー）することは、法律で認められた場合を除き、著作者および出版社の権利の侵害となりますので、その場合には予め小社あて許諾を求めてください。
〈検印廃止〉　落丁・乱丁本はお取替えいたします。

家族原点

木戸征治

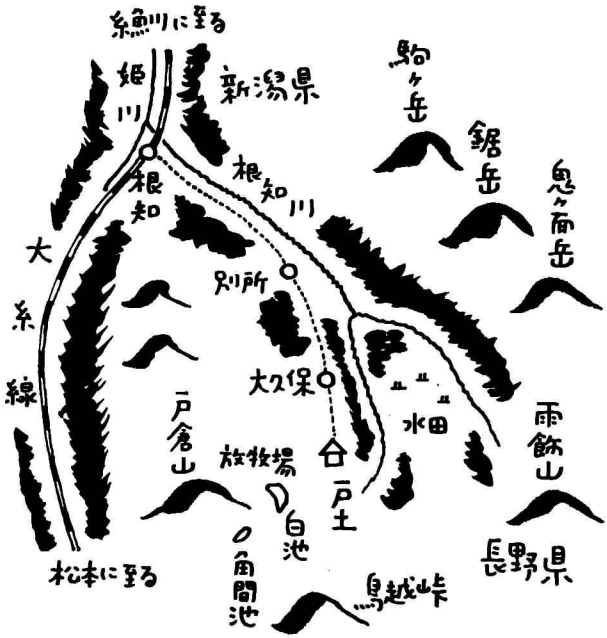
晶文社

ブックデザイン　平野甲賀

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

家族原点＝目次

1 村に一軒残った家 7
2 春――爆発する生命 29
3 分校が崩れてゆく 61
4 夏――草と牛と水と 77
5 秋――山のご馳走 121
6 炭焼き復活 157
7 冬――雪と闘う 167
あとがき 207


糸魚川に至る
姫川
新潟県
駒ヶ岳
鋸岳
恵ヶ面岳
根知
根知川
大糸線
刈所
大久保
水田
戸倉山
放牧場
白池
合戸土
雨飾山
長野県
角間池
鳥越峠
松本に至る

1

村に一軒残った家

たった一軒でふんばる

長野県北安曇郡小谷村戸土。長野県の北西端、新潟県との県境にある静かな山村である。

糸魚川市で日本海にそそぎこむ姫川の支流である根知川の深い谷が山々にくいこみ、起伏がかさなっている。谷を隔てた向い側には、荒々しい山容とボリューム感のある駒三山（駒・鋸・鬼面）の山脈が続く。東南の空にひときわ高く聳える雨飾山。そこから押し流されたように迫る山塊。戸土は、山また山の地である。

生活道路は、新潟県側の県道が一本。買物に行くにも、村役場へ行くにもすべて新潟県経由で行くしかない。

この村をはじめて訪ねたのは、昭和五十二年八月のことだった。

大糸線（松本〜糸魚川間）の根知駅からバスで終点の別所まで行く。そこからさらに四キロの山道を登る。

根知川の清流をはるか眼下に、県道はうねうねと川に沿って続く。

道は草いきれでムッとする緑のトンネル。濃い緑の塊が視界の限り連なる。谷をはい上る風が緑の波となる。思わず立ち止って、深呼吸する。い〜ち、に〜い。白く輝く雲の峰、突っ立つ入道雲。

汗をかかぬようにと、ゆっくり登ったのに十分も歩くと汗がふきだす。ザックのあたる背中や腰もぐっしょりと濡れている。一休みする。ほほをなぜる風は爽やかだ。アカトンボが群舞している。

舗装の道が、石ころだらけの道に変った。ゆるい階段状に茅の原が谷に向って広がっている。豊かで、鮮やかな緑のうねりを見た。豊かな緑の地は、かつては水田であったことをずっと後になって知る。

四十分も登ると大久保部落に着く。あと一息で戸土だ。急坂の道を曲ると、風の方向によって牛の匂いがしてくる。最後の坂を登りつめると、屋根に石をのせ

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

た家があらわれる。たった一軒だけになってこの部落に住みついている赤野敬司さんの一家だ。

新潟県側の県道は、赤野さん宅を通過すると長野県になる。四間×五・五間の家。表の入口が長野県、裏側が新潟県になる。日本海から直線距離で十五キロほどしかない。晴れた日には、海が見える。

道は、根知谷へと急に落ちこみ、数キロ先で行止まりになる。標高五四〇メートル。谷間の斜面にしがみつくように、茅ぶきの家が点在する。ほとんどが空き家で廃屋同然である。

明治時代には二十二戸もあった戸土の集落が、過疎化によってたった一軒になった。冬は、四メートルもの雪が積もる。厳しい自然と闘い踏んばる家族をテレビ・ドキュメンタリーで知った。

「過疎地に一軒になりがんばる人たちとは、いったいどんな一家だろう。」

一刻も早く行って会ってみたい衝動にかられ、猛烈に一家への関心が高まった。そして訪ねたのがきっかけとなった。

「はあー。ようまあ、おいでなすった。さあさあ、まあ上ってお茶にしましょう。」

見ず知らずの訪問者をまるで昔からの知人のように迎えてくれたひげのお父さん。大きな声と明るい笑い顔が健康的な印象をうける。

過疎地にとり残された暗さや、孤独感がまといついているのではないかと思っていたのに、会って話してみてそんなイメージはいっぺんに消えた。

点在する空き家を案内してもらう。

「あすこに見える家ね、この冬の雪でいたんだ屋根を修理しました。」

えっ、屋根も直すのですか。

「ええ、修理は私がやりました。あれは私が生まれた家です。」

人の背丈より高く伸びた草の道を踏みわけて進む。バッタやコオロギが驚いて逃げる。アカトンボが群れる。やっと、戸土全体を見わたせる高地にでる。

杉林の手前に数軒、茅ぶきの家がどっかと眠るようにあった。太い柱が折れ、屋根は真中から曲り、茅が重くのしかかる。数年前の雪で潰れた家。草原にうずくまる巨象を想わせる光景だ。

「ひと冬越すと、雪の重さで、平均一軒ぐらいは倒壊することが普通だ。それに、空き家、つまり、主のいない家はいたみが激しい。」と赤野さんは語る。

「だから、一軒でも潰したくない。冬は、できる限り雪おろしはしているのですがねえ。」

さきほどからウグイスが鳴いている。谷を渡る風の音。風が止ると音無しの世界だ。

潰れた家を見るのは初めてである。近づいてレンズを向ける。二枚三枚、シャッターを押す。心臓がドキドキしてくる。じっと目をつぶる。「十数年前までは家族の団欒があり、ジロ（いろり）には、赤々と火が燃え、子どもの声がはずんでいたんだなあ。」と思うと、悲しいやら残念やらの気持が複雑に交錯して気持が高揚してくる。

空き家の回りは、夏草が行く手をふさぐ。繁茂した草の中に、家を捨て、村を去った人たちが大切に育てたであろう庭の花が一輪、鮮やかに映える。一瞬ドキリとする。

ここで赤野さん一家を紹介しよう。ひげのお父さん、赤野敬司さん（六十四歳）。ただ一人の女性、お母さん、としえさん（五十七歳）。長男、良男さん（三十七歳）。次男、公司さん（三十三歳）。三男、菊生さん（三十二歳）。四男、高志さん（二十五歳）。それに、家族同様の犬が二匹、ネコが二匹いる。

戸土集落崩壊の歴史

戸土には明治のころより人々が住みついていたという。昔から小谷三ケ村といわれてきた、南小谷、北小谷、中土（なかつち）の三村が合併して現在の小谷村になったのは、昭和三十三年のことだ。

明治からの戸数変遷と人口を記しておくと、明治九

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com